まって 2018





7

七月

東京 佐藤 喜孝

烏の子

人は 牡 Z の星に足をかけたらぐらつけり や一年點か 閒 の 宵 0) 0) 空氣 夢を 白 に 見 ず消えな 0) 7 傅 足 ねる 烏 り ぬ 朝 る 鳥 の 子 所 かな か な

東京 七郎衛門吉保

山菜 だけ 羅蕗の合はせ技な 菜 を り 摘み濃き草餅や ぶ 5 O風 筍 れ 味 鞘 新 際 りしゃきしゃきと <u>\f\</u> に 納 に 夏 母 包 の 手 む 0) ピ り 夏

根山

Z



葉山

ポ 昼 皐 屈 月晴れ弟二等で兄五等ールウォーキングの一団寡黙夏日ざし んでから立つサーファーやすぐ沈む Щ の老鶯逗子の吾 の 朝 か ら 咲 て 検 査 妹 子 へ 告 の 白 日

石川 定梶じょう

麦秋

<u>\\ \</u> 哺 子供の日とってもとってもティシュ出てく 夏です 類ヒト と 少女三角乗 月 科 日 ヒト 夜 影 刺 亜 引 く か 種 り 春 を げ み 7 す

埼玉 須賀 敏子

聖五月

贅 茶 かし道古民家カフェ 嵐 畑の畝 沢に星 せ は 0) 食 散 連 ベ ら な 放 ソフ して り 題 富 0) 士 天 苺 幕 に り 村 雲 \mathcal{L}

東京田中藤穂

桜の実

裏 木 子 蔦 を 夏 蜜 深 日 褒 粛 まり ぎて 7 み 5 見 ゐ λ 列 とな 帰 日 塀 り 鳴 実 り < 外 ぬ

煮

 \mathcal{O} 此 氏 こばえや児を追ふ足 の 辺 り 飛ぶせ 斉に夏 0) 田 せら 森 畑 0) 初 ぎや は 草 夏 花 さ は のもどかし ば 昼 葱 な が げ め 色 り り

東京森なほ子

三社祭

街 巫 あ 々とク 女 下鉄 0) つ 0) 遠 口 l 頬 三 z 地 バ 社 な 行 つ 訪る < り 神 に ら た 輿眺 しゃぼん 人 と 青 る め 苜 つ 玉 蓿 風 つ り

東京 赤座 典子

五月

母 幼 口 ックバンドに子と浮かれたるこどもの のカタ 子 忌 る 0) と 日 母 ログどっと屆 友 の少なしと孫五 の 忌 で 母 0) 日 労 は あ き ぬ 五 り 聖 5 月 五. 月 る 月 尽 日

秋川 泉

埼玉

季節が移って

待 満 卵 ツ 開 五. 個 0) 抱 薔 き 薇 び 道 亰 ゐ は 竜 に に る じ 舌 迷 つ ける 蘭 ひ 7 冷 花 雨 外 は 生 草 宴 な 雨



紫陽花

濃 紫 夏 麦 き 陽 0) 子 も 迫 Þ 足 夫 0) 道 り 元 は 青 掃 ょ 11 り 方 粒 0) 好 に と 照 き 抜 会 去 送 り け 釈 返 7 \mathcal{O} 海 線 柚 7

埼玉 大日向幸江

虹の元

高 虹 切 り 衣 慢 \mathcal{O} 分 ブ な 元 ラウ け バ 来 る ラ 西 波 ス を 夫 瓜 に 諫 0) 0) 0) イ め 赤 面 _ ょ 0) B シ 兩 烈 岬 蚊 ょ ヤ 降 を 香 な れ り

五月号作品より

秋川泉・森なほ子

龜鳴くや逝きたる人とけんくゎして 佐藤 喜孝

亀鳴くの季語が動きません。この季語の包容力はす実は楽しかった、と思い出されます。 種も生前と同じです。お互い意地を張っての口論も種も生前と同じです。お互い意地を張っての口論も がってしまった人とケンカするという可笑しさと 逝ってしまった人とケンカするという可笑しさと

春の雷眠りの深き子浅き子も 秋川 泉

ごいですね。

(なほ子)

思われますが、いかがでしょう?(なほ子)な句です。季語「春の雷」の軽やかさがぴったり。可は中八になってしまうので避けたほうが、と夏の雷は眠りの浅い子は起きてしまいそう。中七の三好達治の詩「太郎の屋根に~」を思い出す素敵

春の雨夜の献立決めてをり

石 森

理和

した時間を過ごされたことでしょう。(泉) もう「今日は、外出をしない」と自宅でゆっくりともう「今日は、外出をしない」と自宅でゆっくりともっ、作者は夕食の段取りもすっかり決めて、

さざめごと起きる茶室や豆御飯 大日向幸江

茶懐石に豆御飯が亭主から振る舞われた。白米とな会話を楽しまれ、その後の御濃茶は格別に美味しな会話を楽しまれ、その後の御濃茶は格別に美味しかったことでしょう(泉)

ピンクピンクと繩跳びねだる男の子 黒澤 佳子

男の子だってピンクの好きな子はたくさんいま

兜太去り今年の花の白さかな 七郎衛門吉保

ンクを買ってもらえたかな?(なほ子)

だ。荒凡夫で生きると云う人間が自由だ。それが金 から「人間とはいいものだ」その人間がどんどん殺 る。どこまでもぶれない反戦の「戦争は悪だ」の俳 二〇一八年二月二十日に亡くなった。生活の中であ 色を失った。 子兜太の気骨。 人。二十五才のトラック島でのすさまじい戦争体験 りのままに詠む。生の人間として活きていく句を作 し合いをして無惨に非業の死を遂げる。それが戦争 花鳥諷詠ではない現実を詠んだ俳人、金子兜太は (泉) 本当に淋しい。 兜太のいない世界は

浅草に客引く車夫や花の冷

篠田 純子

引く若い車夫を詠みながら、「花の冷」の季語。桜 整った句ですね。花時の浅草の賑わい、陽気に客を 歓もそこはかとなく感じさせて巧みな句です。 と赤いひざ掛けの色彩の美しさと同時に、 これも現代の風俗。この作者にしては正統派 車夫の哀 0)

(なほ子)

12

あたたかにハンカチー枚だけ干さる 定梶じょう

たたかに」がちょっと不思議でした。「あたたかし」 えた作者。こんなことも俳句になるのですね。「あ さ」が融合している効果なのでしょうか。 できませんが、 とか、ふつうは切れると思うのですが。うまく説明 とハンカチが一枚だけ干してある。軽い「?」を覚 陽気に誘われての散歩でしょうか、ふと見上げる 強いて言えばこの光景と「あたたか (なほ子)

抜くと決め歯医者へ向かふ花の雨 須賀 敏子

らいものです。折しも花の頃。雨の中を歩いていら に切なさが際立ちます。(泉) したのでしょう。美しい季節に辛い決心。この対比 歯が痛んで決心なさったのでしょうか。抜歯はつ

薄紙に臍の緒なども黴をらむ 竹内 弘子

なみにうちは4回の引越で行方不明になりました。 のもなんだし、 ことに意味があるのかないのか、かといって捨てる (なほ子) 臍の緒、みんなありました。大抵、桐箱に収めら しまいこまれて忘れられています。とっておく 人間が胎生であることの証拠物?ち

灯のともり春休なき保育園 田中

藤穂

働く父母を待つ保育園。 幼稚園とは異なり、 たし

の日々の暮しをしみじみと感じる事が出来ました。

る。この句の中に子どもとその父母、

働く園の職員

かに春休みもない。そして夕暮れともなり灯がとも

仲春の農具繰り出す恵比寿顔 長崎 桂子

詠んだ明るい句です。 少ないと思います。春もたけなわとなり、農作業も いよいよ本格的になります。張り切って働くひとを 晩春と比べ、仲春という季語を使った句は (なほ子)

春隣のど飴がこのバックにも なほ子

をさりげなく詠まれ「春隣」の季語がいいですね。 飴は携帯していたいもの。この何気ない日常のこと りなかったりの日々。外出時、どのバックにものど 冬もそして春が近くなっても、喉に違和感がった

あどけなき柴犬に会ふ桜狩

赤座 典子

あ

あ

寒雷

上終

焉

〜その統括と残された課題

●「寒雷」アルバム/年譜 ●「寒雷」アルバム/年譜

「寒雷」作家の主な作品

~私にとっての「寒雷」

び廻ってその主人とのなごやかな会話が聞こえてく る感じが致します。 柴犬にあった。 うらうらとした日差しの中花を愛でる作者は小犬 何とも可愛らしい小犬が元気に飛 (泉



毎月25日発売 定価1200円(税込)

*セレクション結社「ふよう」千々 特集 芸人農へ帰る 〈グラビア〉俳句界NOW 特別作品50句

加藤登|

冠

子を訪ねる

清水和代「春塘」

佐高信の甘口でコンニチハ

俳句界

望月衣塑子《新聞記者》

取材・新海均(ノンフィクション作家) 和恵美子

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

●楸邨俳論史抄録

神田ひろみ んぐれ

古賀

田村正義 池田義弘 エッセイ

中嶋鬼谷

原九

鬼あきる

ド俳句辞典 (なみ -なみ)

あをキー

ワ

黑井長赤田長長長田赤芝須田森長田東 澤上崎座中崎崎崎中座 賀中山崎中_ 藤桂桂桂藤典尚敏藤り桂藤 穂子子子穂子子子穂こ子穂

黄に染まるいて 木枯や銀杏並

木に残る骨 てふ並木もその

亜

て秋夕焼

迷彩色

鎌倉喜久 鈴木多枝

須賀

倉喜久

末い

道も

杉並木往、秋の風ポ

佳石桂典藤 子動子子穂

赤門を潜

銀杏

か末 なか人

な

いやはや男の涙か菜飯食ふ

須賀

敏子

花並木ゆるり行く酔芙蓉の並木低か

人走る

を蜂の涙ぬぐへる仕草して を蜂の涙ぬぐへる仕草して を蜂の涙ぬぐへる仕草して を蜂の涙ぬぐへる仕草して を蜂の涙ぬぐへる仕草して をり戻ぬぐへる仕草して かなかなの止む時胸に涙あり原爆忌 春分や野球に涙時忘る西蔵の花野に立ちて涙は緑陰に涙あつめしレノン 十三夜ピエロの 涙涙か冬蜆したな蜂汁 んめふく て天の の川から下りてきしくハーモニカ冷し酒の止む時胸に涙ありぬぐへる仕草して に立ちて涙せり式が気に入らぬしレノンのな 次の小劇 元から下 0 のの 淚帽 痕を見て了ふ 一角になった。 額子 の花

15

14

淵脇

破 顏 Oみ そ \mathcal{O} 他 抹 消 花 0) 雲 佐 藤 喜 孝

竹 0) 花 新 た な 出 会 \mathcal{O} あ り さう な 石 森 理

和

花は散り散らぬ菜の花主役かな
七郎衛

採りの胡瓜に夜の温度あり 篠

朝

芥車時めき花の下すすむ 定梶じ

塵

いてあなたの誕生日 須賀敏子

桜

草

咲

前月抄

室 大日向幸江

草

餅

 \mathcal{O}

香

漂

Z

調

理

篠田純子

定梶じょう

喜孝抄

春

O

雲

パ

ス

テ

ル

調

O

天

井

画

赤

座

典

子

散

り

つ

ŧ

る

花

に

埋

Ł

れ

7

泣

童

秋

Ш

泉

再

会

 \mathcal{O}

花

見

弁

当

円

座

7

赤

座

典

子



夏

近

玄

関

辺

り

土

V

ぢ

り

長

崎

桂

子

春

愁

B

か

 \emptyset

 \mathcal{O}

脚

O

は

が

ね

色

森

な

ほ

子

花

を浴

び

老女

 \mathcal{O}

お

辞

儀

な

が

な

が

と

田

中

藤

穂

和

服

著

7

ゆ

<

とこ

ろ

な

亀

鳴

け

り

竹

内

弘

子





佐藤喜孝

七郎衛門吉保

石庭の玉砂利のごと柿の花

見立て俳句である。 なったやうだと打ち興じる作者。おもしろく、成功したがの落花の数にあらためて驚く。わが家の庭が石庭に

我が 庭も ハワイ島ほど花柘榴これほどに落ちても実を付く柿の花

が省かれてゐる気がするのだが。
る。「ほど多い」「ほど鮮やか」「ほど赤い」など形容詞のでにに行ったことのない私には解りにくい作りであいワイを知っていることが前提で作られてゐる。ので

葉桜の時季に感謝しゆるり行く葉 桜 は 心 身 癒 す 景 を 成 す花 水 木 近 所 の 誼 広 め を り

桂子さんの句は身辺を見つめ時の移ろいに心を添へてわが身辺には自然が少ない。蝉の声も聞こえぬ。嘆いてわが身辺には自然が少ない。蝉の声も聞こえぬ。嘆いて出来る)高円寺の蚕糸の森公園へ出かけた。大きなポプリの木と噴水の音の中で本を堪能してきた。さう、蝉も聞いてきた。表紙の写真がそれである。明日は句会、この体験を桂子さんのやうに力まず句に出来たらと思っての体験を桂子さんのやうに力まず句に出来たらと思っての体験を桂子さんのやうに力まず句に出来たらと思ってある。

秋川泉

疾走馬尻尾の先まで夏来る緑蔭のテラス子雀餌をねだる枇杷の実の黄のほの見えてまだ小粒

すっきりとした作品である。を熱狂させる。その靡く尻尾まで「夏来る」は問答無用、あきない。チータも負けてはいない。馬はその中でも人馬の走る姿はほれぼれする。陸上競技で走る人間も見

須賀 敏子

筆竜胆バス定刻で乗り遅れ特A米「彩のきずな」と新茶かな憲法記念日母は九条を好みます

あらう。

のバスまで筆竜胆の咲く野辺を楽しまれたことであったことを愉しんでゐる「バス定刻で乗り遅れ」であいてがまさかの定刻に来たのであった。乗り遅れてしいスがまさかの定刻に来たのであった。乗り遅れてしいと来るはずはないと高をくくったのがいけなかった。辺りに筆竜胆が咲いてゐる。このバス停にバスはきち

田中 藤穂

青葉寺蛇の目さしくる相撲取筍 の お 刺 身 を 先 づ 寺 座 敷

夕焼けや穂高連峰ふりむけば

感動を間接的に伝へてゐる。「ふりむけば」と最後に置いた。これにより作者の驚き、感動であったらう。言語に言ひ尽くせないことは諦めて回も見てゐたであらうが、実景は比べることが出来ない回失の中の穂高連峰。写真などでこれに似た風景は何

森 なほ子

夏神 楽白き面の白からず神輿の声狼藉めきぬ巫女舞におが三つ並ぶ駅の名夏近し

と云はれなければ白い面であったらうに。と云はれなければ白い面であったらうに一葉を見た記憶はあるのだらう。白からずる。緑の多いところに神楽殿はあるのだらう。白き面であるはづの神楽面、時代物であらうか白らう。白き面であるはづの神楽面、時代物であらうか白らう。白き面であるはづの神楽面、時代物であらうからら、お神楽を見た記憶はあるが今はどうなってゐるのだる。お神楽を見た記憶はあるが今はどうなってゐるのだ

定柄じょう

電線に揃ふはをかし燕の向き洗 剤 の 壜 が 硝 子 の 向 う 側長き日や塗って大いにペンキ余る

た。
「はしたて集」は巻頭句のある選句欄とは違ふ。この「はしたて集」は巻頭句のある選句欄とは違ふ。この

る。おもしろいし、おもしろがってゐる。ンキで塗ったそのものより余ったペンキに心を残してゐ一句目五七五のリズムをはずして長き日の、そしてペ

見たやうだ。燕の向きも揃ってゐるのだらう。それも又記憶を辿れば四五羽で電線に止まってゐたのをどこかでしにとっては絵空事。東京で見ることは叶ふのだらうか。三句目、燕が電線に並んで止まってゐるなどは、わた

をかし。辞書のをかしの項には ①こっけいだ。おかしい。変だ。 ②興味深い。心が引かれる。おもしろい。 ③趣がある。風情がある。 のでれている。見事だ。変らしい。 のでれている。見事だ。変だ。

石森 理和

お供へし直ぐに下ろしてお初枇杷持ち合はせなんとか叶ふ枇杷求む店先のびわをしばらく見つづける

20

ける、健康、といふものは何にも代え難い宝物。慶祝。にしても糖尿病に克ち、好きなものを気兼ねなくいただんの求めやうとされた枇杷は高価な上物のやうだ。それ同好の士、今年も沢山食することが出来大満足。理和さ枇杷の実連作。余程枇杷がお好きとみえる。わたしも

大日向幸江

毎日が日曜日です桜ん坊月陰に影となりたり包丁研ぎの生まれたる塩辛蜻蛉葉裏かな

本さうである。一方通行がまどろこしい。作者の説明が欲しくなるときもある。「包丁研ぎの」句ならこちらから質問も出来るがここではさうもゆかぬ。 和これ云ふのは優しいが、文章にするのは難しい。句会れこれ云ふのは優しいが、文章にするのは難しい。句会のは調を崩されて以後お会ひすることがない。句会である。

「毎日が日曜日」といふ慣用句は日常会話にもよく使 「毎日が日曜日」といる情用句を自分の言葉に推敲することも可能でしょう。読んだ人がオヤッと 葉に推敲することも可能でしょう。読んだ人がオヤッと 葉に推敲することも可能でしょう。読んだ人がオヤッと 葉ってくれればしめたもの。こんなことも作句の、推敲 思ってくれればしめたもの。こんなことも作句の、推敲 思ってくれればしめたもの。こんなことも作句の、推敲 日 毎日が日曜日」といふ慣用句は日常会話にもよく使の楽しみの一つ。

井上 石動

恋しさの増してくるゝなほとゝぎす

といふ句意か。元歌のあるやうなやうな句である。ほととぎすよ、その鳴き声で恋心を増してくれるな、

まさりけり つらゆき ほととぎす人まつ山になくなれば我うちつけにこひ

の寂しく人が恋しくなってしまった)で鳴いている。その鳴き声を聞いていたら、私は急にも(ほととぎすが、人がだれも来ない山(待つだけの山)

れな文になってゐるやもしれぬ。
石動さんの句歴などもお聞きしたことがないので的外

おとなしき町や青葉の高野山

結ばなかった。
人々が多く住んでゐる町なのかも知れぬが今ひとつ像がおとなしきは人間、広げても犬猫のたぐい。おとなしき青葉の頃の高野山の在る町はおとなしい町だ、と作者。

日を返す螺旋階段リラの花

る。建物の外の階段。リラの花が咲いてゐるのは、外国光沢があるか、明るい色か、螺旋階段が日を返してゐ の風景のやうに思った。

赤座

新緑や城めくホテル塔を持つ 飛び飛びに植田の増えし帰り道 「柑橘の湯」に一夜で替はる「菖蒲の湯」

ある。。 完成した。 段見慣れた景であるが最後に「塔を持つ」といふ一句が 新緑の木々を抽きでて大きくて高いホテルの建物。 ホテルが見えてきた。 なかなか云へぬ措辞で 普

篠田

飯 三粒 咥へ高みへ親すずめ夏立つや三こゑ連ねて夜のからす さくら通りすずらん通り花マロニエ

「あをやぎ句会」は銀座一丁目額会場。昔は此処をなん

事欠かないやうだ。 告げる鴉。なかなか健気ではないか。 とだらうから雀も必死。よく観察すれば身辺には句材は よく出てくる。生活の中から詠まれた大切な句。立夏を を鞄に入れていく。今月は宇佐江真理の「髪結い伊三次 代小説の舞台。ここへ来るときはその時代小説の文庫本 と言ったのだらうか。八丁堀・木挽町・小伝馬町など時 云はれてゐた。 捕物余話」。他の人も通ふ楽しみの一つに場所があると 純子さんの句に登場する鳥も鴉とか雀が 虫なども少ないこ

ずらん通」は都内だけでも十五カ所以上。由来は神保町 字通り桜並木があるのであらう。 が大正十四年ころ、すずらん型の街路灯を付け、 」「すずらん通」はどちらであらうか。「さくら通」は文 カルな調べは読む者も素直にはれやかになる。 が繁栄したことにあやかり各地に広がったとあった。 りもあるが、命名される場合もある。掲句の「さくら通 掲句は七面倒くさい句ではない。軽いタッチでリズミ 名前が付いてゐる通りがある。 自然発生的に付いた通 全国各地にある。「す 商店街

あをキーワード俳句辞典(なむーは)

南無人師遍照金融南無人所遍照金融の一個無人可屋おもの 雨戸開けぽとりと守宮南無阿弥陀冬立てり南無喝羅怛那多羅夜耶南無と言ひアーメンと言ひ去年今年 南無阿弥陀 して南無観世音銀杏黄葉 七度び唱えてお茶の花 七の墓の白あぢさみ 一瞬いぬふぐら ぬふぐり 石篠篠藤堀定篠 森田田野内梶 じよ 理純純寿一よ 治 和子子郎 う子子

佐定鈴渡石石定佐篠 藤梶木邉森森梶藤田 じ多 喜ょ枝友理理ょ喜純 孝う子七和和う孝子

黒澤 篠田 純子 篠田 純子

煮魚の眼を舐りをり春の暮ちゃんちゃんこハッカドロップ探し舐め 竹黒内澤 弘子 弘佳 子子

竹内

要情の鋏の刃先開幕式 別を研いで水を濁せる夕月夜 別を研いで水を濁せる夕月夜 が表入れて林檎の蜜を確かめる これほどに鉈の刃毀れ竹の秋 ので当つる水餅硬し朝厨 ので当つる水餅硬し朝屋 ので当つる水餅でし朝屋 ので当つる水がで水を濁せる夕月夜

本洩日に葉のうら光り雉子啼く 一ひらの葉に染まりゆく雨蛙 場否の葉厚く重なる雨の道 場否の葉厚く重なる雨の道 ツイストの葉に囲まるる水仙花 ツイストの葉に囲まるる水仙花

渡石山渡松佐後渡邉森荘邉本藤藤邉 友理慶京 七和子子 米喜志京子孝づ子

佐藤 恭子



鐡などをとりこんでをる秋のくさ

ていると思っている。
類等宇宙にあるもの同種間において通ずる言で意思伝達は行われるものと思っている。俳句を愉しんでいる私は、動物・植物・魚生きているものには能力の違いこそあれ、それぞれの意志があ

かし骨子はうごかない。

が詠み手は大勢いるわけで、鑑賞は違ってもよいわけである。し者にまた違った印象を与えるときが多々ある。つくり手は一人だいる。偶然に見た光景をそのまま句にした。句ができてみると読いる。偶然に見た光景をそのほかのものを取込んでいると詠まれて

くないものを隠してしまおうと、秋の草の意思を感じたのではなに鉄も含まれよう)、自分にとって見なくてすませたいもの又みた秋の草にも意志がはたらいた。捨てられた雑多なもの(その中

伝わってきて面白くよんだ。かろうか。「とりこんでをる」に拠って秋の草の生きていることが

縫針にふくらみありぬ冬の母

24

昔の人は自分の着るものは自分で縫ったような気がする。祖母はいつも膝の上に布がのっていたように覚えている。祖母の布ははいつも膝の上に布がのっていたように覚えている。祖母の布はとひらいていた。生きている人が居なくなってしまった。一学校の入学式・といら辺かも聞くことが叶わなくなってしまった。小学校の入学式・といら辺かも聞くことが叶わなくなってしまった。祖母の布は着ている。母とは有難いものだった。

ろあって、昔は骨・象牙・青銅などで出来ていたようだが今は鋼この句のお母さんは、縫針を使っているようだ。針にはいろい

製である。その中でも和針には絹針・紬針・木綿針があってそれなるとちょっと丸みを帯びている。目がすこし見えなくなった祖なるとちょっと丸みを帯びている。目がすこし見えなくなった祖は手の感触で穴の方向を確かめていた。針先はとんがっているけれど針穴までいく過程で微妙に違ってゆく太さやまるみがある。けれど針穴までいく過程で微妙に違ってゆく太さやまるみがある。とによって、下五の冬の母がいきてくる。冬になると誰しも寒さとによって、下五の冬の母がいきてくる。冬になると誰しも寒さとによって、下五の冬の母がいきてくる。冬になると誰しも寒さとによって、下五の冬の母がいきてくる。そんさるとれる。

壹歳半の滋子を輕視す冬の猫

出してくる。先日公園で赤ちゃんが子犬の紐をひっぱっていた。うと思う。特に動くものは自分の範囲外であろうがなかろうが手をうと思う。そうなると今まで以上に興味があちらこちらにむいてうと思う。そうなると今まで以上に興味があちらこちらになる。歩けるよ赤ん坊も一歳を過ぎるとだいたい歩けるようになる。歩けるよ

そのうち犬の方に手をだして、耳はひっぱる、目の中に手を入れていたのであろうか子犬ががぶりと噛んでしまった。親がそ慢をしていたのだろうか子犬ががぶりと噛んでしまった。親がそばに居るので何となく眺めていたのだが、やっぱりとびあがる程だいたのであろうか。そのうち右記の子と同じように、そばにいる猫に触りたくなったのであろう。それこそしっぽをひっぱったりしている様子が目に浮ぶ。私が公園で見た子犬と違うところは、猫は大人だったのだろう。せっかくの日向ぼこが邪魔されてしまった。場所替えをしようと立上がったのだろう。そのままうしろも見ずに移動してしまった。見ていた作者はきっと憤慨したのだろう。自分の子供を相手にしなかった猫に!

がやっぱり可愛いに違いないということが良くわかる。軽視すという堅い言葉が使われている。猫より自分の子供の方

たいと強く感じた。

にもかわることが分る。大事によく考えて十七文字を遊び勉強しにもかわることが分る。大事によく考えて十七文字を遊び勉強し二句ともちょっとした言の葉の使い方でこころの動きが如何様

あとがき

青冩眞を読む

前頁の末尾に次の三行が続く。

違うと鑑賞眼が違うかどうか。 を鑑賞してみたい気がする。時間と環境が 来なかったがまたの機会があったら同じ句 二十四回かけて鑑賞した。 一冊全部は出

ていただいた。句会で誰も採らぬ句を恭子が採る 一度読まれた方には申し訳なかったが再録させ 夫婦ねえと云はれたこともなつかしい。

原子炉とダム

がこのニュースも聞かない。便りの無いのがよい 頼りの類か。下々まで正しい情報が下りてきてゐ は一と月も早く梅雨が明け水不足の心配があった 騒がれてゐた。今原発のげの字も聞かない。関東 るのだらうか。情報操作されてゐるのではとげす 動かないから電力不足、暑さから身を守るにはと エアコンを付けろと云ふ。数年前だったら原発が 猛暑で連日熱中症のニュースが続く。無理せず

の勘ぐりをしたくなる。

旧漢字

なった。 稽に思へるときがある。(喜孝) 置き換ってしまった。こだわってゐるわたしを滑 蠅・簞・螢・櫻・鷗・鶯である。後は大方略字に 俳句の世界も旧漢字・正字を使ふ人が僅かに 比較的生き遺ってゐるのは、亞・蟬・摑・

カット/松村美智子・福井美佐子・ティリ印刷・製本・レイアウト

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

26